

# デモクリトスとクローンの問題

森 一郎

## はじめに——もう一つのポイエーシス問題

ごく当たり前のことだが、ひとは誰しもこの世に生を享けて生きている。「現に存在している(Dasein)」とは、「生まれてきた(Geborenssein)」ということの意味する。生命の問題は、少なくともそれが死の問題であるのと同程度には、誕生の問題である。

生きているかぎりわれわれは、死の可能性に晒されているのみならず、この世に生まれ落ちたという誕生の事実を背負って存在している。だが人間は、たった一人で死んでいくようには、たった一人で生まれてはこない。自殺と同じ意味では「自生」はありえないのだ。「可死性(Sterblichkeit)」以上に、「出生性(Gebürtlichkeit)」という人間の条件は、「複数性(Pluralität)」というもう一つの被制約性と、深い縁で結ばれている<sup>(1)</sup>。

赤ん坊が個体として生まれるという出来事は、そこへと生れ落ちる世界との、また風土や世代との、なかならず生みの親との、出会いでありめぐり合わせである。出生には、九鬼周造による偶然性の定義「独立なる三元の邂逅」が、強い意味で当てはまるのである。しかも、この誕生に先立って、男女が契りを結ぶという、もう一つのめぐり逢いが生じなければならぬ。このように、子が「生まれること」——誕生の出来事——は、子を「生むこと」——生殖ならびに出産という協働——と、切り離しては考えられない。ここに「性(Geschlecht)」という生の二元的相克の本領

がある。「死すべきものども (die Sterblichen)」という古くからの呼称に加えて、「生まれ出づるものども (die Geborenen)」というふうに人間を呼ぼうとするなら、女性が子を「産む (gebären)」、および男性が子を「儲ける (zeugen)」という、対化された「仕事」の役柄に、おのずと突き当たるのである。

以下では、生殖・出産という仕方で新しい生命を授かるという、この「ポイエーシス」問題に、一定の角度から光を当ててみることにしたい。なるほど、有用物の製作としてのポイエーシスとはまた別に、芸術的創造という制作の次元があることは、アリストテレスこのかた、とりわけ近代美学の成立以降、少なからぬ論者の関心を惹いてきた。人びとのあいだで演じられる「プラクシス (行為・活動)」を、「為す (Handeln)」ではなく「作る (Herstellen)」というモデルで理解しがちだった従来の政治思想にひそむ難点に関してなら、アーレントの透徹した批評がある。<sup>(2)</sup>だが、芸術や政治の問題はいざ知らず、「生むこと」をどこまで「作ること」として理解してよいかというもう一つのポイエーシス問題については、議論が尽くされてきたとは言いがたい。「物作り」とは明らかに異なる性格をもつ「子づくり」という人類に普遍的なテーマを、古人の知恵と先端テクノロジーとを往還しつつ、しばし呑気に考えてみたいのである。

### 知者の言葉——養子縁組のすすめ

子どもを「産む・儲ける」ことには、それがめぐり合わせである以上、偶然性がつきまとう。妊娠なんてまぐれ当たりみたいなものだし、母子にとっては出産自体、命がけの労苦である。しかしここでは、どんな子が生まれてくるかは予見できない、という危うさに絞って考えてみよう。出生前診断をどれほど慎重に重ねようと、誕生にはつねにリスク、つまり危険が伴う。すでにデモクリトスが、この種の「危険 (kindynos)」を回避する一方策を述べている (断

片B二七七)。ソクラテスとほぼ同時代のこの古代唯物論のチャンピオンによれば、子どもは自分でつくるより他人からもらうほうがよい、というのである。

何か子供をつくる必要がある人は友人の誰かからもらった方がよいとわたしは思う。そうすれば、彼には彼が望むような子供ができることになる。欲するような子供を選ぶことができるからである。〔…〕他方、自らつくる場合には、そこには多くの危険がある。なぜなら、どんな子が生まれるにせよ、その子と付き合っていかなければならぬ<sup>(3)</sup>からである。

こう言われると、子どもの側からは「こっちだって自分で選んだわけでもない親と付き合っていかなければならないのだ！」と言い返す声上がるだろうが、その点はひとまず措く。あるいは逆に、血を分けた親子関係、つまり「血縁」がここでは無視されており、「肉親」に大切に育てられたいと思う子の側の願いが——ひいては（腹をいたためて産んだ母）親の側の執着が——顧慮されていない、との疑義も、このさいやり過ぐすことにしよう。

昔から人類は「里子」「養子」の制度をそれなりに築いてきた。「肉親―実子」の間柄が絶対的だったわけではない。つい最近まで（といっても半世紀単位くらいで考える必要があるが）「家督」相続にさいしては血縁と非血縁とを問わず選択肢を広くとる、という対処法のほうがむしろ主流だった。その点、現代人は確実に料簡が狭くなった。自分の遺伝子を受け継いだ「実の子」でなければ自分の子どもとして育てる気にならない、という頑なな考えにわれわれがこぞって取り憑かれ、子宝に恵まれない夫婦が躍起になって人工受精手術を受けている、という昨今の光景のほうが、異常といえるべきなのかもしれない。そこには、現代の遺伝生物学譲りの「血統」思想の影響を知らず識らずのうちに

受け、次々に提供される生殖技術に頼ることです。ますます依存体質になってゆく、現代人の姿がある。今日のテクノロジ―純粹培養ベイベー世代からなる「発明は必要の母」の時代にあつては、「必要は発明の母」の逆、つまり「必要は発明の甘えん坊」なのである。

「不妊」が今日ほどフラストレーションの種となるような時代はかつてなかった。その性的けしかけの仕掛けが引き起こす現代残酷物語に比べれば、「石女」などという大昔からの差別用語の暴力性など、まだかわいいほうである。自分のDNAを後世に残さなければ、との強迫観念を植え付けられた顧客の群れで、生殖医療業界は賑わいをみせている。別の選択肢があたかも存在しないかのような偏狭な技術信仰をふりまき、諦めるのを忘れて一途に帰依することを強要する新手のドグマが、大手を振ってまかり通っている。われわれが「イエ」という旧制度に疑いを抱くようになって久しいが、その遺制の幻想ぶりを唾う前に、遺伝子工学による同一性神話を脱神話化するほうが先決なのではあるまいか。万世一系の夢まぼろしに劣らず、遺伝子神話にも、個体の死を超えておのれを存続させたいという人類の不死性願望が内蔵されているのだとすれば。

閑話休題。子どもを授かることのうちにひそむ予測不可能性という「危険」をしのぐ方策として、デモクリトスは養子縁組を顕彰した。<sup>(4)</sup>だがもちろん、それで万事めでたしということにはならない。幼児がどう育つかは容易に見極められないのが世の習いだからである。立派な親から生まれた輝くような赤ちゃんの前途は輝かしいように見えるが、その予想どおり立派に育つとはかぎらない。むしろ期待は往々にして裏切られる。なぜそうなるかという、誕生という初期条件の偶然性に加えて、成長過程でのさまざまなめぐり合わせにより、子はどうにでも育つからである。だが、だからこそ育て甲斐がある、とも言える。どう育つか分からない可能性を宿しているから、つまり大人の側の一方的な予想・期待を裏切る存在だからこそ、子どもは「新生児」であり「新人」なのだ。その新しさが、ひょっと

すると「旧世界」を救うかもしれない。救世主の到来を待望する心根は、新生児の成長の予測不可能性によって遮られるのではなく、むしろ育まれる。

もちろん、「養子」が「養父」の跡を継いで「新しい時代」をひらく、ということとは十分ありうる。陳腐な例かもしれないが、カエサルの養子となったオクタヴィアヌスが、養父の死後その遺志を継いでローマ初代の皇帝アウグストゥスとなった場合などが、これに当たる。彼はなるべくして「第一人者」になったように見えるが、それは後知恵というものであって、じっさいはあくまで「たまたま」であった。「もしもクレオパトラの鼻がもう少し低かったら……」という想定は有名だが、「もしもオクタヴィアヌスが誘惑されていたら……」という別の想定があったって、一向おかしくないのである。<sup>(5)</sup>

誕生という初期設定だけでその人の生涯を見極めることができないという不確定性は、人生における、とくに成長期における数々のめぐり逢いが、いわば「第二の誕生」という意味をもちうる可能性と等価である。見知らぬ人びとと出会い、見知らぬ世界へ入ってゆく邂逅・遭遇の瞬間ごとに、ひとは新しく生まれるのである。もちろん以前のしがらみから完全に解放されるわけではないが、その点では、産声を上げて生れ落ちてくる赤ちゃんだって似たり寄ったりである。赤ん坊は一定の素質、つまり先天的（ア・プリオリ）な条件を背負って生まれてくるのであって、そこに「前世からの宿業」を見出すにしろ、遺伝的因果性を持ち出すにしろ、まったくゼロからの始まりということはない。

新たな始まりである以上、第二のそれを含めて、誕生にはリスクが不可避である。逆にいうと、このリスクなしに「新しさ」はありえない。「被投的企投」（ハイデガー）という背負い投げは、自由である分だけ、危険とつねに背中合わせなのである。偶然に翻弄される危うさを引き受けようとしないう安全志向は、新しさと反対の方向を向いている。

ところが、現代の「生産」技術は、デモクリトスの提唱した安全策を超えて、「欲するような子供」を「もらう」可能性を新たに案出しつつある。「クローン人間」製造技術——ヒトに関する「個体クローニング」——がそれである。デモクリトスが「軽い卒中の発作」(断片B三二)と形容した生殖行為<sup>(6)</sup>によらず、細胞胚の人工培養によって、親と同じ遺伝子をもつ子を「作ってもらう」方法が、今や開発されようとしているのである。この新「養子」縁組を論ずるうえでは、ふた通りの「もらい方」を区別する必要がある。まず、(1)同一遺伝子のコピーが問題となる場合。次に、(2)優秀な遺伝子をもった人間の産出が目指される場合。以下、それぞれにつき考察を加えていくことにしよう。

### 複製技術としてのクローニング

個体クローニングとは、一種の「単性生殖」の技術化であって、両性による「かけ合わせ」を排除して、同一個体の再現をもくろむものである。片親コピーを事とするこの複製技術には、複数性がらみの偶然的要因を忌避しようとの底意が、はっきり見てとれる。

遺伝子工学によるこの新種のポイエーシスは、「生殖・出産(procreation)」である以上に、「増殖・複製(multiplication)」である。「子作り」は「物作り」に酷似したものとなる。技術による介入を本質とする点で「自生」とは言えず、自作自演の自殺のような「意識の自発性」とも無縁だが、単一物を複写して模造されたレプリカの「同型性」程度ならそなえているのが、この「オートポイエーシス」である。「自同性」がここでは問題となる。

一般に「作ること・生産(production)」には——アリストテレスの四原因説でもそうだが——、①材料と、②作りのほかに、③作るうえでの何らかのモデルと、④何のために作るかという目的、とが属する。この四つの要因は、人工物のみならず自然物にも見出されるが、自然界にはそれらすべてが内在している。生物種としての人間の生殖活動

の場合でもそうで、人間という「種・形相」(Ⅱ③)が、同時に「テロス」(Ⅱ④)でもある。だが、人間が「子づくり」に励む場合、生物学的次元には必ずしも還元されない「作為的」側面が問題となる。自分という個体の、もしくは自分の属する共同体の、後継「世代」を確保するため、という別種の目的性が見込まれるのである。世代交代に断絶は付きものであり、人間世界に由来するこの趣旨を貫徹するためには、モデルの再現にこだわらなくともよい、それゆえ、危険を冒して子づくりに励むには及ばない——とするのが、デモクリトスの「もらい子」代替案であった。そこではデザイン(Ⅱ③)の同一性は考慮外となる。これに対し、生産品の準同一性をあくまで追求するのが、クローニング技術なのである。問題は、その場合の目的性(Ⅱ④)、つまり「何のためにクローン人間を作るか」である。

一時は、「本人が死ぬ前に自分のクローン人間を作っておけば、個人の死を超えて生きることができる」、などと盛んに吹聴されたりもした。種の存続でも後継者確保でもなく、個体の再生こそ、クローニングの究極目的だというわけである。不死性の大安売りともいうべきこの想定が、個人の誕生と死にまつわる予測不可能性と取り返しのつかなさ、言いかえれば、いのちのかけがえのなさ(uniqueness)を、飛び越えてしまっていることは明らかである。情報の原本と複写のあいだの準同一性と、生身の人間の「誰であるか(who)」つまり人格同一性とが一緒にされられているばかりか、(遺伝子コピーにもとづく)身体上の準同一性、いやたんなる類似性が、魂の永続性に重ね書きされ、すげ替えられているのだから。これこそ、形而上学の十八番であった「魂の不死」説のテクノロジー版ではなからうか。身体は滅びても同一の人格が生き延びる、と考えられているのだとすれば。

常識的に考えて、自分のクローン人間を作って喜ぶ人がそういるとは思えないし、それで「永続する生」を得たと思う人がいるとも信じがたい。むしろ、薄気味悪いと思う人のほうが多いのではないだろうか。だが、別な需要なら見込めそうである。つまり、複製される「オリジナル」自身がではなく、その元々の製造責任者つまり親が、わが子

のコピーを欲しがるということならあってもおかしくない。子供が死にゆくとき、その遺伝子を使ったクローン人間を求める場合がこれである。じっさい動物レヴェルでは、親代わりつまり主人が、わが子同然の身内つまりペット（要するに家畜）の死に面前して、その複製を買い求めるという選択肢が、早くも商業化されつつあると聞く。

死者に代わって新たに生を享けた赤ん坊は、いわば「生まれ代わり」である。遺伝子複製によってはたんに「よく似た子」、つまり一卵性双生児しか作り直せないとしても、親の目から見れば、亡き愛息子（娘）が生き返った、あるいは少なくとも生まれ変わったように見えることだろう。つまり、「親子」のめぐり合わせが再現されるのである。ここには「親子孫」の関係は生じていない。オリジナルとコピーは親子関係ではないのだから。（両性生殖を基本とするかぎりはそのようである。せいぜい「親子子」といったところか。）それゆえそこには、「世代交代」もない。むしろ、再度の——理念的には無限に反復可能——「やり直し」があるだけである。

しかし、それは親の目にそう見えるだけである。じっさいには、クローン人間はオリジナルとは別な時代を生き、別な人びととめぐり逢う。つまり、異なる世代に属するまったくの別人である。個体複製を超えて世代をそっくり人工的に再現することは、途方もなくむずかしい。つまりクローン人間も、新世代に属するれっきとした「新人」なのだ。親がそこに、死んだわが子の姿を見出すとすれば、むしろそれは、子に先立たれたあと孫を見て「忘れ形見」と思うのと似ている。この場合「形見」は「片身」なのだ。

このように、人格同一性の保持をクローン人間創造の目的とすることは、デモクリトスのな出生のリスク回避というよりはむしろ、死の取り返しのつかなさへの、ひいてはいのちの一回性・不可逆性への挑戦、という意味をもって（<sup>8</sup>）いる。つまり、死のリスクの回避策なのである。ただし、ここで問題となっているのは、死一般でも生一般でもなく、生まれ出づる存在としての人間である。なぜなら、親が子のクローンを欲しがることまでは理解できても、子が親の



クローンを求めるというのは理解しがたいからである。親に死なれた子が、自分の親の遺伝子を使ったクローン赤ちゃんを育てるというのは気違いじみている。かえってそれは、死んだ親を愚弄することになりかねない。子でありながら、親の一卵性双生児である叔父(母)の養父(母)となる、というのだから<sup>(9)</sup>。

だがそれをいうなら、もはや帰ってこない子どもと同一遺伝子をもつ片割れ赤ちゃんを手に入れることだって、死すべきいのちのかけがえのなさを傷つけるという意味では、大同小異ではなからうか。双子の兄(姉)と入れ違いでこの世にやってきた赤ん坊は、いかに「二重写し」に見えたとしても、まったく別個の人格である。それをたんなる「再生」と見なすとすれば、当人はもとより、遺伝子提供者たる故人の死そのものに対しても、冒瀆的と言うべきであろう。愛玩動物なら死んでも取り替えがきくかもしれない。だが人間の死は、取り返しがつかないからこそ重みをもちうるのだ。死には「人権」がなく「尊厳」を保障されていないので、蹂躪されるのはやむをえないとしても。

以上は、「同一性」が問題であることから察せられるように、「同じことの繰り返し」が、つまり、自然界および生命界の反復的永続性が、技術的に模倣されるケースである。死を超えて同じであろうとする「自己保存」の努力が、ここの原動力となっている。<sup>(10)</sup> ソクラテスの遺訓を借用すれば、ただ「生きること(zen)」がもっぱら求められていると言ってもよい。これに対し、同じクローン技術でも、「よく生きること(eu zen)」を求めているかに見えるレヴェルがある。たんなる「生きんとする意志」(ショーペンハウアー)ではなく、より以上を欲する「力への意志」(ニーチェ)の発現であるかのごとき「優生」の思想が、そこには見てとれるのである。

### 優生技術としてのクローニング

クローン技術が、他の延命医療と際立って異なるあり方を示すのは、生き永らえるだけにとどまらない「よき生」

の問題次元、いわゆる「クオリティ・オブ・ライフ」に関わってくるからである。よく生きるための生の技法——かのデモクリトスの忠告が指し示していたのもこの方向であり、こちらにわれわれの関心も集中することになる。

たとえばこういう議論がある。——かつてプリンストンの高等研究所には、アインシュタイン、ゲーデル、フォン・ノイマンといった「高等人間」(ニーチェ)が集った。彼らのような逸材の遺伝子から「ジュニア」をクローン再生すれば、もう一度最高度の頭脳集団が生み出され、人類の知的水準は確実にアップするにちがいない、云々。

注意すべきは、この場合「お家の存続」や「一族の繁栄」といった家族単位の福利が問題となっていないという点である。血を分けた子孫という観念なら、昔ながらの養子制度にもなかったわけだが、家督といった次元を優に超えた「人類の進歩」なる大目標が打ち出されるのである。ここでの「進歩」は必ずしも「科学」に限られない。発明家エジソンのクローン、芸術家ピカソのクローン、野球選手ベーブ・ルースのクローン、さらには大衆煽動家ヒットラーのクローン、というふう<sup>(1)</sup>に——こういう挙げ方自体、ステレオタイプのきわみだが——各種の領域での「天才」再来の夢を描くことができる。

プラトン以来、「優生学(eugenics)」、つまり優秀な子種を選抜することで人間の品質を高めようとする考え方は、ポリスのためという大義名分をもつものであった。政治単位が民族という出生規定に一元化された近代の行き着いた先に、優生思想が国家政策として大々的に採用されたことは記憶に新しい。(1)のコピー技術としてのクローニングが、ペットの再生需要に顕著なように、もっぱら「私的」目的に振り向けられるのに対し、(2)の高等人種培養テクノロジーのほうは、「公益」中心であるかのごとくなのである。生まれてくる子どもは、親や一族が「もらう」のではなく、国家もしくは人類全体が「もらいうける」しくみになっている。ここでは、子どもは公共の財産であり、国家の所有物なのである。かりに「共有財産」という言葉遣いが形容矛盾でないとすれば、の話だが。

デモクリトスは、血縁にこだわらず、「友人」つまりポリスの共同参画者から養子をもらったほうが「欲するような子供を選ぶことでき」、より「よい」としていた。「多くの子供の中から意に叶った子を得ることができるといふ点で、それだけ勝れている」<sup>(12)</sup>からである。ポリスの友愛を背景とするこの「優秀選抜」のすすめは、しかし、優生技術としてのクローニングとは異なり、公共の「福祉(well-being)」を第一義に据えてはいない。デモクリトスは明らかに、「自分のもの／他人のもの」という区別を前提して語っており、基本的には、家庭管理術によせての「知者の言葉」と見るべきである。そして、だからこそかえって、つまり「自／他」の区別を堅持しつつ親子関係のあるべき姿を論じている点で、デモクリトスはなお「市民」の見地を保持していたと、逆に言えるのである。<sup>(13)</sup>

これは、デモクリトスが「友」の子どもをわが子することに抵抗を抱くべきではないと考えており、それだけ市民間の連帯を心がけている、という意味では必ずしもない。くどいようだが、養子制度はべつに古代ポリスの専売特許ではなかった。むしろここで確認すべきは、生まれてくる児らの「共有」を唱え、しかも家族制度の解体(自由恋愛つまり乱婚)による優生政策を構想した、同時代の革新派プラトンに比べると、デモクリトスはよほど穏健であり、ポリスの前提条件であった家庭をうまく治めるための無難な「よき子育て」の方策を推奨している、という点なのである。

もちろん、プラトンと同じく生涯(打算のうえで)結婚しなかった哲学者デモクリトスは、「かわいそうな孤児を引き取って養育する」といった人道主義を称揚しているのではない。彼もやはり「よき生」を求めていると言わなければならない。だが、血統は度外視しても、子はあくまで個々の親に属すると常識的に考えている点で、優秀な子どもたちの養育権を国家に帰属させようとするプラトンとは、断然異なるのである。

しかしだとすると、「友のものは共同のもの」としたプラトンのほうが、ポリスを優先させ「公共の福祉」の見地に

立っていることになるのではないか。そう聞かれるにちがいない。そうではないのだ。ポリスがポリスであるゆえん、つまり共同世界の公共性は、家とその私秘性との対照においてはじめて意味をなす。プラトンはまさにその公私の別を、男女の別もろとも骨抜きにし、プライヴァシーを破壊してまで市民を「国Ⅱ家」という単一の巨大なイエ共同体のために奉仕させようとする。<sup>(14)</sup>そこでは、生まれてくる子どもすら、国家の共有財産と見なされ、モデルに合った「国づくり」のため暴力を用いて加工されるべき「材料」となる。プラトンの国家変革構想は、反ポリスの政治思想ともいうべき大いなる矛盾を含んでいた。彼の理想国家でフリーセックスにより高等品種の産出に励むエリートたちは、お互い「友」である以上に、「家族・親族・同族」なのである。『国家』における優生思想とは、自他の区別がそのうちでは撤廃され、誰もが一個の全体に奉仕することを余儀なくされる大文字の一家にとっての「明るい家族計画」だったのである。<sup>(15)</sup>

じつは、それと同じことが、「クローン人間の創出は人類の進歩のため」という正当化にも当てはまる。何のための「アインシュタイン・ジュニア」かといえば、「人知のさらなる前進」ということになるのだろうが、その場合、「国境」はもちろんのこと、「家族」という基礎単位も止揚されている。どこへ止揚されているかといえば、一握りの精鋭集団のめざましい働きによって恩恵を受け、安寧を約束された「人類社会」へである。

ナチスの迫害をきっかけに米国に集結した、ユダヤ人を中心とする頭脳集団によって、原子爆弾は開発された。この「マンハッタン計画」はアメリカの国益に沿ったものであったが、原爆テクノロジー自体は、その後たちまち人類の共有物となった。科学に国境なし、とはこのことである。その往年の知的密度を再現しようとするのが、二十世紀のクローン優生学である。夢よう一度、といったところであろうか。

## あまり明るくない家族計画

では、この大いなる「ファミリー・プラン」は成功するであろうか。やってみないと分からない、と言われれば、その通りかもしれない。だが、ジュニア世代が一般相対性理論を超えたメタ物理学を構築し、不完全性定理をいっそう完全ならしめる数学無根拠論をあみ出す、といった可能性は、少なくとも私には想像できない。科学者の伝記や偉人伝のたぐいを読むと実感することだが、彼らが自分の才能を開花させたのは、ほとんど奇蹟に近いことなのである。まったく別様の人生を歩む可能性が無数に存在していたことは疑いようもなく、ろくでなしや落伍者になっていた蓋然性は非常に高い。なかでも一番ありえたのは、何でもない凡人に生涯とどまった、という可能性である。

なるほど、異才・異能の遺伝子をそっくり受け継いで生まれた子どもに高度のエリート教育を施せば、ある程度の「成功」は期待できるであろう。たとえば、フォン・ノイマンが核兵器に関する膨大な計算処理用を開発した「オートマトン」つまりコンピュータを、いっそう性能アップさせるために投入されるテクノクラートくらいなら、わけなく提供できそうである。だがその程度なら、べつに特殊技術を用いなくとも、いくらでも研究者養成はできる。あるいは、「遺児」たちに国際平和の「遺志」を伝道してもらうくらいことは、いくらでもできよう。先端研究を廃業した元科学者が、反戦平和の宣教師になったり、にわか仕立ての形而上学者になったりすることは、よくある話である。それに類する勤めなら、クローン人間にだって果たせるにちがいない。

しかし思うのだが、クローン技術が優秀な「人材」を製造・供給できるとして、それは主としてエリート教育のおかげであって、生殖段階での特別な産出法によるものではない。それほど人間の成長というものは微妙な代物なのである。それを、サラブレッドの走りは種馬で決まる、といった話と同一水準で論ずることはできない。いやサラブレッ

ドの育成にしたって、とてつもなく絶妙な技術を要する、だって？——それはそうだろう。しかし、それと比べものにならない靈妙な諸段階を駆け上がっていくのが、人の一生なのである。これを人間中心主義と言いたければ言えよ。ともかく、人間をウマ並み、もしくはホルスタインや霜降り和牛程度に引き下げておいて、それどころか、カエルの子はカエル式の「種の論理」<sup>(16)</sup>に引きずり落として、それで人間の「よく生きること・幸福」を論じることができると思うのは、見当外れというものである。ヒトよりウマのほうがまだマシかもしれない、との猜疑に取り憑かれる悪夢を描いたのはスウィフトであったが、ヤフー嫌いの彼が、その同じ反ユートピア小説のなかで、科学技術幻想に翻弄される人びとの愚かしさを克明に記していたことを忘れてはならない。

いささか結論めくが、避妊具ならぬクローニングによるハイパー家族計画が提供できるのは、せいぜい優秀な官僚程度である。もう一步押し進めて言おう。クローン優生技術が得意とするのは、肉体上および精神上の高性能労働者、つまり高級奴隷の製造なのである。「ロボット」という語が「人工の労働者」<sup>(17)</sup>という原義を有するかぎりにおいて、クローン優良児とは、ロボットたることを運命づけられて生み出された、しかし機械ではない生身の人間にはかならない。機械人間がそうであるように、クローン人間も「片輪」である。彼の場合、その機能が「形見片身」であることに存し、原作たる片割れに合わせて一方的にデザインされていること、その意味で複数性をえぐり取られたまま誕生したことが、「片端」であらざるをえない理由である。

生まれるや否や、「超そっくりさん」である宿命を背負って人生を歩んでいかなばならないとは。そんな「宿業」——出生以前のアプリオリな負荷——を引き受けて生きる苦しみたるや、想像を絶するものがある。出来すぎの兄弟と比較されたり、有能な親に期待をかけられたりするだけで、ひねくれたり非行に走ったりするのが、若者のつねである。その不自由さの極限まで行き着いたような不当な仕打ちを受けることになるクローンエリートたちは、果たし

てどんな人生を選ぶであろうか。自由を愛すれば愛するほど、彼らは、みずからの知力を尽くして復讐の挙に出るのではなからうか。彼らは、おのれの自由を賭して、つまり人間としての誇りと尊厳にかけて、「不良」であろうとするだろう。

クローン人間は、計画に沿って製造される点で、自由を奪われている。あらゆる道具と同じく、目的のための手段としてもっぱら存在しているかぎりはそうである。つまりここでは、本質が実存に先立つ。奴隷とは定義上、自由を剥奪された存在であるが、それと同じく、官僚とは円滑な行政のための手段、国家の召使でしかない。だが、どんな役人にだって私生活はあるし、家庭のささやかな幸せというものは許されている。奴隷にだっていつか解放の日がないともかぎらないし、才覚や勤勉次第で道が開けてくることもある。ところが、かの近未来優良児たちは、その「存在」そのものが丸ごと、国家規模あるいは人類規模の家族計画という「投企（プロジェクト）」の所産であり、そこには私生活もへったくれもない。生まれてから死ぬまで人生全体が模造の人生であることを、ア・プリオリに要求されているなどという、そんなむごい仕打ちが他にあらうか。

『二〇〇一年』にしろ『ブレードランナー』にしろ、現代のSF（映画）には、人造人間による人間への復讐というモチーフを含んでいるものが少なくない。その二十世紀の古典といえば、チャペックの『ロボット』（一九二〇年）だが、さらに遡ると、シェリーの『フランケンシュタイン』（一八一八年）へ、ひいてはミルトンの『失樂園』（一六六七年）へ行き着く。<sup>(18)</sup>『創世記』という太古からの言い伝えを通して語り継がれてきた、被造物による造物主への復讐、つまり墮天使による神への反逆こそ、十七世紀に自然観察と製作技術が結ばれたことで生み落とされた「ロボットの反乱記」の原点なのである。

何かに役立つモノを「作る」仕事は、一定の計画のもとに実施される。そこには、素材の一定の抵抗を見越す算段

こそあれ、製作物が製作者に反逆してくる事態までは想定されていない。だが、相手がいささかでも自由を有する存在である場合には、計画は狂い、誤算は不可避となる。官僚機構が勝手に暴走しがちであるのは、その構成員に自主性があるからこそである。それと同じく、神の作った天使や人間が墮落したのは、自由を授けた製造責任者の誤算であったと言いたくなる<sup>(19)</sup>。自動機械にもそうした反逆可能性があるとすれば、生身の片輪人間製造計画にはその危険性はいっそう高いであろう。

「子づくり」は、それが自由で独立な人格を生み出すことを第一義とするかぎり、製作モデルではうまく行かない。無理やり計画に当てはめデザイン通りの子孫を作ろうとすればするほど、失敗することだろう。家族計画はしよせん、「予防的」（作らないようにするという用途）にしか有効でないのだ。とはいえ、子づくりや子育てのうえでの「誤算」は、何ら嘆くに値しない。そこにこそ、新しさの生まれる余地があるのだから。

出生にまつわるリスクをできるだけ回避したい、という安全志向が、デモクリトス、プラトンから現代までの優生思想の核心であった。その路線上に浮かび上がってきたのがクローン技術である。だが、どんな安全策をとろうとも、別な危険が、しかもいっそう大きな危険が待ち受けているとすれば、われわれ人間はいったい何をやっているのだろうか。なるほど、デモクリトスの推奨する程度の出生管理技術なら、大過なく運用できる見込みがありそうだし、じっさい人類はその実績を積み重ねてきたとも言える。しかるに、今日のバイオ・テクノロジーは、養子縁組といった規模をはるかに超えた、リスクの大きい企図に乗り出しつつある。だとすれば、現代技術はもはや、安全志向とは真に向かい対立する何かを内蔵している、と断ぜざるをえない。



## ミノタウロスの惨劇

独身派デモクリトスのもらい子奨励論に、子づくりのリスク回避という底意があったのと同様、片身人間工学の正当化の論理にも、生にひそむ偶然性を免れようとする野心がちらいついている。単純化して言ってしまうと、(1)の複製技術による同一性復旧策は、可死性という人間の条件に対する抵抗の一形態であり、(2)の優生思想的な天才純粹培養計画は、出生性のおりなすデタラメさに対する操作的介入のかたちである。死と誕生にまつわる残酷な偶然をなるべく抑えこみ、飼い馴らそうとするバイオ・エコノミー（生管理術もしくはいのちの節約）——それが、クローン技術の人間への応用なのである。

ここに、みずからの有限性・被制約性を乗り越えようとする、太古以来の人類の野望がひそんでいることは否定すべくもない。一世紀ちょっと前に発せられた言葉をいれば、人間が人間以上であろうとする意志、つまり「超人」たんとする法外な欲望が、そこには表明されているかのごとくなのである。

じっさい、ニーチェがその誕生を夢見た「超人」とは、「力への意志」という彼の思弁的理想主義の具現化であるはずだった。同時代の進化論を横目でにらみつ、古代の「英雄・半神」崇拝の再生として元古典文献学者が威勢よく世に送り出した、この人間超克の思想は、その後、ナチスの優生政策にハクを与えただけでは収まらず、それこそヒューマニズムを超えて、現代の遺伝子テクノロジーを呪縛し続けているのであろうか。

だが、ニーチェの名誉のために言っておきたいが、彼の超人思想には、科学技術の助けを借りてアクシデントを回避しようとするケチくさい守りの姿勢は、微塵も見られない。「大地の意義」たるべき超人が、そっくりさん大集合のなかから生まれてくることなどありえない。ツァラトゥストラの言う「贈り与える徳」ならぬ「矮小化する美德」ば

かりがはびこる百年後の末人の世に現われたのが、クローン技術なのである。気前のよさを誇りとする自由精神が、いのちのリスクを算段して不死性を手に入れようというのでは、話にならない。予測不可能な、それでいて取り返しのつかない仕方で襲いかかってくる、運命という名の偶然性におじけづくようでは、超人など夢のまた夢である。自分の息のかかった高等人間たちが破滅してゆくのを肯んじたツァラトゥストラなら、弱々しい人類改造計画を繰り出す人知など「大いなる正午」の炎に焼き滅ぼされるがいい、と叫ぶことだろう。<sup>(20)</sup>

べつに私は、「クローン人間の製造は人道的に許されない」などと主張するつもりはない。賭けてもいいが、技術的可能性がそこに存在する以上、もっともらしい博愛主義的理由を持ち出しては研究プロジェクトの実現に漕ぎつける利巧者が、必ずや現われることだろう。<sup>(21)</sup> 他方、クローン人間の「生まれ出づる悩み」への同情に訴えてブレイキとするつもりもない。そんな他人事めかした同情をかけるヒマは、われわれ現代人にはこれっぽっちもないと思うからである。

「クローン技術の人間への応用は是か非か」という議論に対する寄与は、もともと本稿の能くするところではない。<sup>(22)</sup> 私自身は、ペット蘇生術にしろ、天才量産計画にしろ、巷に流布しているクローニングの便益なるものは、くだらないの一語に尽きると思うが、それは私個人の趣味判断であって、他人に強要できる代物ではない。ついでに言うと、人類に対する憎悪に燃える不良集団を作り出すのが関の山のエリート養成にうつつを抜かすヒマがあるなら、目の前にいる「自然児」たちを鍛え上げて、運命にへこたれない強靱な若者に育てるほうが、よほど先だと思うが、これまた私見にすぎない。

とはいえ、ここで話を終えるわけにはいかない。リスクの問題が、クローン技術の場合、従来の優生思想をはるかに超えた、いわば神話の深みに達するからである。

選りすぐりの遺伝子を用いてのハイパージュニアの供給が、物騒な反感を本人たちから買うおそれがあることは、すでに述べた。だが、このいささか空想じみた危険を憂う前に、もっと差し迫った技術的リスクを考慮に入れないわけにはいかない。クローニングをヒトに施すさい、その人体実験が、少なくとも当面、夥しい数の「出来損ない」を作り出すことは必至なのだから。複製にそこそこ成功した個体を一つ得るために、多数の犠牲が産み落とされるとすれば、これはもはや、「安全の確保」どころか「危険のばら撒き」以外の何ものでもない。お目出たは出たら目と笑ってすますわけには、この場合いかないのだ。

出生性という人間の条件が、ここでふたたび難問として立ちはだかる。誕生という事実をそうやすやすと取り消すことはできない相談だからである。物作りの場合なら、ある程度やり直しがきくかもしれない。だが人間が相手だと、そうはいかない。たとえ人工的に作り出された技術の産物であっても、それどころか技術上の誤算の結果であっても、ひとたびこの世に生れ落ちた途端、新生児は一個の存在としておのれを主張しはじめる。

じっさい、いのちの予測不可能性と取り返しのがたなさ、赤ん坊という偶然の申し子のうちに凝縮して示されている。そのユニークな存在に出会ったからには、親たちも、好むと好まざるとにかかわらず、ものはずみのような現実に向き合わざるをえない。小さき者の唯一性を否定することは、生まれ出づる存在たる人間の自己否定を意味するからである。そんなわけでひとは手放しでおめでたいと言いかうにとどまらず、予想外の出来事にうろたえたり頭を抱えたりもすれば、試練として受け入れたり美化したりもするのである。思えば、かの箴言でデモクリトスが「どんな子が生まれるにせよ、その子と付き合っていかなばならない」と忠告していたのも、出生の事実のこの抹消不可能性ゆえだった。

近代科学を特徴づけてきた「実験」は、ベイコン以来、「作る」の発想で成り立っており、それゆえ何度でもやり直

すことが可能であった。追試行できないような実験は、そもそも「科学的」とは見なされず、最初の原爆投下ですら、複数回行なわれたほどである。ところが人間の生き死にが係わってくるや、そうは問屋が卸さなくなる。都市は復旧しても、被験者にさせられた市民のいのちは決して元には戻らない。しかも「死ぬ・死なれる」以上に、「生まれる・生む」の場合、話は厄介になる。もちろん、生き延びる人びとがいるかぎり、生殖・出産は繰り返されるであろう。だが、放射能を浴びた母胎から産まれた奇形児は、抹消しがたく一回かぎりの生を享け、いのちあるかぎり自己を主張し続けるのである。「生存権」が国民国家の保障する基本的人権かどうかは知らないが、この手垢の付いた概念に否定したいリアリティがもしあるとすれば、おそらくそれは、生まれ出づるもの一人一人がともかくも「存在しなければならぬ」という事実<sup>(23)</sup>に由来する。

生のこの既成事実化がどの時点で発生するかは、人工妊娠中絶をめぐる議論の主要なトピスをなしており、今それを論ずるつもりはない。<sup>(24)</sup>ここでは、新しい生命が「存在しなければならぬ」のは、そもそも「存在しないこともありえた」という出生の偶然性と裏腹の関係にある、という点のみ確認するにとどめよう。非存在の可能性がいくらでもありえたからこそ、そして今なお、また今後も十分ありうるからこそ、「現に存在していること(Dasein)」の現実性が、果てしなく「まれ」で「有り難く」思えるのである。

だが、「いのちの尊厳」を金科玉条と心得る現代人と違って、誕生そのものを「最悪」とまで公言する度量を有していたのが、古代ギリシア人である。正直な彼らは、出生の事実がはらむ残酷さを、よく出来たある神話に形象化し、後世に伝えている。われわれはその物語、つまりミノタウロス伝説を、現代に産声を上げたバイオ・テクノロジーの危険を警告した古人の知恵というふうに解釈するだけで満足してはならない。生むことは作ることとどう違うか、についての人類の普遍的な理解がそこには結晶しているのだから。

この言い伝え自体は、壮大な神話の環の一面面をなすものであり、詳細はここでは取り上げられない<sup>(25)</sup>。牡牛に扮したゼウスがエウロペに孕ませた子ミノスはクレタの王となる。その妃パシパエは、海神ポセイドンゆかりの名馬に恋するあまり、異能科学者ダイダロスの助力により、みずから牝馬に扮しむごと本懐を遂げる。その結果生まれた半人半馬の化け物が、ミノタウロスである。妻の乱行を恥じたクレタ王は、この異形の子を、これまたダイダロスに命じて作らせた迷宮の奥深くに隠す。幽閉され凶暴化した怪物のために、当時クレタの属国であったアテナイから乙女たちが生贄として差し出される。そこで、アテナイの勇者テセウスが女装してクレタに乗り込み……。

その後の顛末はニーチェ『ディオニュソス』に任せよう。グロテスクなこの怪物譚がわれわれに示唆的なのは、生殖上の失敗作が生み出されたとき、ただちに処理されなかったことである。意に染まない児らを闇に葬るという選択肢は、ギリシア人の得意技であったものの、この神話ではそうっていない。余計な温情をかけるとあとに禍根を残すことになるゾ、という教訓にしては、あまりに念が入りすぎている。血を分けた子でもないのに、ミノスがミノタウロスを生き永らえさせたのは、いったんこの世に生まれ出でた小さきいのちの抹消不可能な事実性ゆえとしか考えられない。望まれぬ子であったオイディプスの場合もそうで、いったんは捨てられるが、羊飼いや養父に救われて育つという筋立てになっている。撤回したくともできないのが、誕生という出来事の重みなのである。避妊に失敗して生まれたオイディプスの呪われた運命は措くとして、生殖工学の産物ミノタウロスが助命されたことは、のちに痛ましい惨劇を引き起こすことになる。いのちの抹消不可能性が生み出すのは、なにもヒューマンなドラマだけではないのだ。<sup>(26)</sup>

出生の偶然は、クローニング技術によって飼い馴らされるどころか、逆に猛威をふるう。その危険性は、現段階ではまだ技術が未熟だから、という理由で黙認されるには、あまりに残酷である。それを突破してまで実施される研究

の「効用」とは、いったい何であろうか。安全性の反対を行こうとするクローン研究が、たんなる「効用」とは違う何かを追求していることに、かくしてわれわれはふたたび思い至るのである。

現代のダイダロスたちは、自分の実験の産物を、ラビュリントスに閉じ込めることなく、隠密裡に処分しうるのであろうか。そのためには、自由人の勇敢さとは違った種類の器量、つまり冷酷さを、よほど持ち合わせていなければならないはずだが。もっとも、迷宮さながらに専門化が進んでしまった現代、自分が何をやっているか考えたこともないスペシャリストに、製造責任をとってもらおうと期待すること自体、幻想なのだろう。

(未完)

## 註

(1) もちろんだからといって、「死ぬこと」と対をなす「死なれる・死別する」という痛切な受動経験を、いわんや、可死性と複数性とがきわどく繰り広げる「殺す・殺される」の相互関係——ホップズ自然状態論の根本問題——を、無視してよいということには、少しもならないのだが。

(2) 「活動(Acting)の伝統的代替物としての制作(Making)」と題された『人間の条件』第三一節——独語版『活動的生』では「行為(Handeln)を製作(Herstellen)に置き換えて不要にしようとする伝統的試み」——を参照。プラトン以来の西洋政治哲学の総体を批判するこの大胆なテーゼは、存在は古代以来「被制作性(Hergestelltheit)」という地平から了解されてきたとし存在論の歴史の解体を企てたハイデガーに対する、アーレントなりの批判的応答でもあった。この点については、拙稿「制作と哲学、制作と政治——「ハイデガーとアーレント」のために——」(『現象学年報15』、一九九九年、所収)を参照。

(3) H. Diels/W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 2, Griechisch-Deutsch, 13. Aufl., 1969, S. 202. 訳文は、『初期ギリシア自然哲学者断片集③』、日下部吉信訳、ちくま学芸文庫、四〇五頁、による。

(4) 斎藤忍随『知者たちの言葉』(岩波新書、一八七頁)では、この断片B二七七は、「いかにも知者らしい辛辣な寸言」の一つと評されている。デモクリトスの知恵もしくは理性が、「予測によるリスク回避」に向けられていたことは、断片B二七六からも察せられる。「子供を持つのは無用というのが私の意見である。私の見るところでは、子供の所有には大いなる危険(megalous kindynous)と多くの苦難がつきまとうのみで、得られる恩恵は少なく、しかもその恩恵も微弱にすぎないのである」(同書一八一頁の斎藤訳による、Die Fragmente der Vorsokratiker, Bd. 2, S. 202)。「危険」というキーワードを介して、デモクリトスの自然哲学と倫理的発言とは結び合わされうる、というのが、われわれの提案である。

(5) もちろん小カエサルは、大叔父の轍を踏まない慎重さを有していたからこそ、後に神格化されるほど時代を押し進めることができたのだろうが。それにしても、王政ローマ最後の王タルクィニウス・スペルブスが甘やかした息子スキアンダルがもとで廃位の憂き目にあったという伝説にせよ、五賢帝の最後を飾る哲人マルクス・アウレリウスが不肖の息子に位を譲って帝国を衰退させたという故事にせよ、古代ローマ史には実子相続の弊害を警告する訓話が少なくない。それだけローマ人は養子縁組の知略に長けていたということか。王政といえど世襲制ではなかった点にも、古代ローマの知恵は表われていよう。

(6) 「デモクリトスは性交のある病気のようなものと見なして、災いの一種と考えていた」(『初期ギリシア自然哲学者断片集③』、二九二頁、断片B三二一への訳注)。

(7) とはいえ、これまでの「常識」がからきし通用しなくなっているのが現代である。なるほど、「自分と同じ遺伝子をもった存在が、違う環境でどう生きるか、いわば「ありうべき別の自分」を見てみたい、という知的好奇心」から自分のクローンをつくってみたい、という科学者の欲望は(上村芳郎『クローン人間の倫理』、みすず書房、三六八頁参照)、さすがに今日でも市民権は得られそうにない。だが、別の動機なら、つまり「苦しんでいる弱者から苦悩を除去し、より幸福な世界を作る」という功利主義的目的なら、むしろ歓迎される時代である。同性愛者の女二人は、不妊に悩む夫婦以上に、クローニングによる生殖を望むであろう。「血を分けた子どもものいる、人並みの人生を送る」ことが「人権」だとすれば、こうした願いは無下に斥けられてはならぬ、ということにもなる。生殖における男性の介入を不要とするこの志向が興味深いのは、「女性だけの世界」の夢が俄然実現味をおびてくる点である。モンテーニュの伝える「アマゾン族」の次の風習を参照。「この女性の国家では、男性の支配を避けるために、男児が生まれるとすぐに、腕や、脚や、その他、男性を女性より

も優勢にしやすいような身体の部分をすべて不具にして、男性をこちら側のわれわれが女性を使っているような目的（ここでは、性欲処理ではなく、子供を儲けること、に取っておく）にだけ使った」（『エセー（六）』、原二郎訳、岩波文庫、六二頁、括弧内は引用者）。家母長制「クローン族」では女性の絶対的優位は揺るがぬであろうし——少なくとも遠い将来に人工子宮が開発されるまでは——、「弱き性」へのケアが別途必要になることだろう。

(8) これは、「生まれ代わり」が欲しい、というケースではなくても、つまり、両性生殖が不可能となった親が、死んでゆく一人っ子の「身代わり」のクローン人間を欲しがる、という特別なケースでも、同じことである。死による喪失を埋め合わせたいという目的性自体は変わらないからである。「第二の創造」により贖いの羊ドリーを生み出した現代技術は、『創世記』の「アブラハムのイサク奉獻」のドラマから、息子を失う親の苦悩をそっくり除去してしまう。パウロによって莊重に脚色された「神の子イエスの死と復活」のドラマも、クローニングによる抜け道を想定することで「科学的」に説明されるや（上村前掲書、六七頁参照）、ありがたみは確実に薄まる。陳腐化や劇画化も科学による啓蒙のうち、ということだろうか。クローニングによる「教祖よみがえり」だけは勘弁願いたいものだ。

(9) 「世界内存在」に立脚するハイデガーは、死を、死すべきものどもにとって「追い越すことのできない (unüberholbar)」可能性とした（『存在と時間』第五〇節参照）。それと同じく、「世代 (Generation)」という複数的規定は（同書第七四節参照）、生まれ出づるものどもにとって、決して跨ぎ越えることのできない条件である。

(10) 骨髄移植のドナーを得るべくクローン双生児を作り出すというケース（上村前掲書、二〇九頁以下）や、クローン胚から作られるいわゆるES細胞を用いての難病治療（同書第一章「ES細胞の研究」参照）も、死すべきいのちへの挑戦という面をもっているが、可死性のこちら側での操作である点、落命後の再生をもくろむものとは違ったタイプである。なお、これら「延命」医療が、従来の「脳死＝臓器移植」問題と異なるのは、クローン技術が一般に、出生のタブーへの挑戦という性格を併せ持つからにはかならない。

(11) 十八世紀末、フランス革命の渦中にいたコンドルセにとって、「再現」に最も値する天才は、大数学者「オイラー」であった。「オイラーの組織が数世紀ののちに再現されるものと仮定しよう。そうすると、今日知られていないいろいろの方法や、まだ発見されていない非常に数多くの真理が、この新しく生まれた者に、数年間の研究ののちに、今日われわれが提出しようと考えることさえできないような問題を解決させるに至るであろう」（『人間精神進歩史 第二部』、渡辺誠訳、岩



波文庫、三五二頁、表記を若干改めた)。自死に至る逃亡中に記されたコンドルセのこの大胆な夢想——近代版「哲学の慰め」——は、クローン技術が「人類の進歩」という啓蒙の理念と親和的であることを示している。

- (12) *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 2, S. 202. 『初期ギリシア自然哲学者断片集③』、四〇五頁。

- (13) デモクリトスのポリス重視の見解については、断片B二五二を参照。「国家にかかわることは、国家が立派に統治されるよう、自余の何にもまして重要と考えねばならない。然るべき限度を越えて野心を持つべきではないし、また公共の利益に反して権力を自らのものとすべきでもない。なぜなら、立派に統治された国家は「もうそれだけで」最大の繁栄だからであり、その一事にすべてはかかっているからである。そして、国家が救われるなら、すべては救われ、国家が減じるなら、すべては減じる」(*Die Fragmente der Vorsokratiker*, Bd. 2, S. 195f. 『初期ギリシア自然哲学者断片集③』、三九四頁、括弧内は邦訳者による補足)。だが、古代のアトシストのこのポリス第一主義と、現代人の誇る「個の尊重」への道を拓いた原子論者ホッブズのコモンウェルス絶対主義とは、見かけ以上に近いのかもしれない。今日では、「共生社会のため」という大義名分が、優しく唱えられている。

- (14) プラトンが『国家』第五巻で展開した「公共のための子づくり」(461A)論に関しては、アーレントの次の注釈を参照。「プラトンは家庭や家族を廃止しようとした、とする解釈はよく見られるが、これは誤りである。それどころか、彼が望んだのは、一つの家族が全市民を包みこむほど、家族生活のタイプを拡大することであった。言いかえれば、プラトンは家庭共同体からその私的人格を取り除こうとしたのだった。彼が私有財産と個人的な夫婦関係の廃止を勧めたのは、このためである」(H. Arendt, *The Human Condition*, The University of Chicago Press, 1989, p. 223. 志水速雄訳『人間の条件』、ちくま学芸文庫、三五二頁以下)。「妻たちが共同のものであり、子供たちが共同のものであり、全財産が共同のものであるということ」が、「最善の国制」の条件であるとの主張は、『法律』でも基本的には変わっていない(739C. 森・池田・加来訳、岩波文庫、上巻三〇六頁)。プラトンの掲げた「共生＝共産」の理想——「いわゆる個人のものが、生活のあらゆる面から、あらゆる手段をつくして、すっかり拭い去られ、そしてほんらい個人のものとされるものさえ、何とかして共同のものとなるように、たとえば、目や耳や手が共同のものとして、見たり聞いたり働いたりするとみえるような、さらにすべての人が、同じものに喜びや悲しみを感じ、称賛にも非難にもできるかぎり一致するようなあらんかぎりの工夫がこらされる」(739C-D. 前掲訳書三〇六頁)——は、全体主義を経験した現代人にとって、あまりに生々しい。

(15) 生殖・出産という意味での「人づくり」が、教育という人間形成と並んで、ユートピア思想における主たる関心事であり続けてきたことは、プラトンの衣鉢を継ぐモアの『ユートピア』やカンパネラの『太陽の都』にも明瞭に看取されうる。いずれにおいても、「子作り」は露骨なほど「物作り」として理解されている。この場合、禁欲主義を掲げるか否かは、むしろ副次的な問題である。

(16) 「ヒトはヒトを生む」というアリストテレスの命題は、自然における「種」の準同一的反復を定式化するものである。現代のクローニングが、その技術的模倣もしくは補完をめざすとしても、その「自生（アウトマトン）」現象は、同じことの永遠の繰り返しという自然のあり方をべつに超えるものではなく、むしろ強固にするのである。そのように増強された自然の猛威が、脆い人間的世界——そこでは、予測不可能で取り返しのない出来事が歴史を形づくってきた——に入り込んできている点に、現代の危機は存する。

(17) カレル・チャペック「ロボット」という言葉はどのように生れたか（千野栄一訳『ロボット』、岩波文庫、所収）、一九八頁、参照。

(18) 『フランケンシュタイン』の「怪物」の一番の愛読書は、『失樂園』だった。創造主に反逆するサタンに、彼は自分を同化させたのである（メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』、山本政喜訳、角川文庫、一五五頁以下、参照）。なお、この英国ゴシック小説と同時代にドイツではゲーテが『ファウスト』を書いているが、作者の「日の目を見ずに死んだ子」コンプレックスに妨げられてか、人造人間譚としてはおくれをとっている。ただし、ルネサンスに対するドイツ人なりの「水子供養」と考えれば、それなりに深いものがある。ニーチェが、再生能力をもつディオニソス神を頼みとしたのも、分かるような気がする。

(19) キリスト教の教義からすれば、もちろんこうは言えない。たとえば、アウグスティヌスによれば、「神は悪魔を創造されたとき、悪魔の将来の邪悪を知らなかったことはけっしてない」。「神は悪魔をつくったとき（…）すでに、神の予知によって、悪魔を、それが悪になったのちどう用いるべきか、その用意をされたと解されるのである。」（『神の国』第十一卷第八章、服部英次郎訳、岩波文庫、第三分冊、四九頁）

(20) プラトンの名譽のために言っておけば、彼は、ソクラテスの弟子として、(1)の「ただ生きる」ためのクローン型延命医療のみならず、(2)の意味での「よく生きる」ためのクローン型優生医学をも、恥知らずと一蹴するにちがいない。プラトン

の（法曹および）医者嫌いは、『国家』第三巻に明らかである。「一国に放埒と病気がはびこるときは、数多くの裁判所と医療所が開かれ、法廷技術と医療技術とが幅をきかすことになるだろうね——自由人ですら大ぜいの人たちが、ひどくそうした事柄について真剣な関心を寄せるような状況では」（405A、藤沢令夫訳、岩波文庫上巻、一二七頁）。プラトンの哲人王国家論の近代における正嫡は、優生思想ではなく、ニーチェの超人思想のほうである。

なお、もう一点申し添えれば、プラトンは『法律』で、たんなる医療蔑視でなく、現代のいわゆる「インフォームド・コンセント」の理念を披露している。奴隷における治療が問答無用であるのに対して、自由民においては「同意」と「説得」によって診療がなされる、というのである（720A-E）。近代の医療現場が、医者と患者からなる強制・労役場の様相を呈してきたことと照らし合わせてみるべきであろう。

(21) アーレントは、すでに一九六〇年の段階で、『活動的生』（『人間の条件』のドイツ語版）の序論において、「試験管のなかで生命を産み出そうとする試み、人工受精により超人を生育しようとする試み、突然変異を発生させて人間の形姿や機能を根本的に「改良」しようとする試み」を、人工生命の専門研究者たちが是が非でも追求したがる理由を、はっきりこう述べている——「なぜなら、いったん踏み入れた道はどんな道でも最後の最後までたどる、という鉄則が、科学の本質にはひそんでいるからである」（H. Arendt, *Vita activa oder Vom tätigen Leben*, München 1994, S. 9）。

(22) 人工生命実験の是非に関するアーレントの次の判断も、傾聴に値する。「この問いは第一級の政治的問題であって、この理由からだけでも、専門家——専門科学者であれ、專業政治家であれ——に問題決定をゆだねてしまうことはできない相談である」（ibid.）。クローン問題とは、生命倫理学という一学問領域の専門テーマなどではない。自分たちの共同世界においてどう対処すべきか、市民一人一人が各人の意見を出し合って議論を重ね、一定の合意に達することが求められる、そういう意味での「政治的問題」なのである。

(23) ハイデガーが「実存」に与えた第一の規定は、「存在しなければならないこと（Zu-sein）」であった（M. Heidegger, *Sein und Zeit*, 15. Aufl., Tübingen 1979, S. 42）。この「すべき」は、「当為（Sollen）」ではなく「存在（Sein）」の性格である。

(24) この「いのちの線引き」はかつては、嬰兒殺しがどの時点から殺人と見なされ、どの時点まではそうでないかという問題だった。未開社会では不具や双子が生まれた場合、人殺しならぬ間引きは当然だったとレヴィ・ブルジュは述べているが、それは「新生児は不完全な存在にすぎない」とされたからである（『未開社会の思惟（下）』、山田吉彦訳、岩波文庫、一五

○頁)。いつ赤ん坊に「生存権」が発生するか、のプリミティヴな線引き方法としては、「母親が、たった一度でも乳を与えたら、その子供は決して殺されることはない」(一四七頁)というケース、「子供が三日間生存を許されれば、その生命は、以後保証された」(同書一四八頁)というケース、さらに、「子供の生命が未だ不確定な(…)期間から解放されるためには(…)命名されることが必要」(一五〇頁)、とされたケースなどがある。命名式とは「存在承認」の儀式、いわば助命式だったわけである。

(25) この神話環のうち、古代の工匠ダイダロスの伝説に関しては、拙稿「奴隷制問題の消息——〈テクノロジーの系譜学〉によせて——(中)」(東京女子大学紀要『論集』第四八巻2号、一九九八年、所収)、の五八頁以下を参照。

(26) フランケンシュタインの怪物誕生の場合も、まったく同様であった。自分の生み出したものが、いったい何を意味するかは、はじめのうちは製作者にも、ほとんど理解できないのである。だが、親とくに「父」にとって、「子」とは大概そうなのではあるまいか。この「親子」関係の謎ときのドラマを、子の側から古典的に演じてみせたのがオイディプスだった。

付記——本稿は、二〇〇二年度に東京女子大学で行なった哲学概論「へいのち」について」の最終回(二〇〇三年一月九日)のために準備した原稿を、さらに書き継いで成ったものである。最初の草稿は、二〇〇一年九月に書かれた。本文中でも使わせていただいたが、当時完結をみた、日下部吉信氏の畏敬すべき訳業『初期ギリシア自然哲学者断片集』全三巻へのささやかな応答という面をもつ。クローン問題に関しては、渡部明、飯田亘之、河谷淳の諸氏から送られた論考からも刺激を与えられた。注にも明らかなどおり、講義用の原稿を書いたのち上村芳郎氏の優れた著作『クローン人間の倫理』に接しえたことは、とりわけ有益だった。個人的にあやかろうとしたのは、斎藤忍随著『知者たちの言葉』だが、この珠玉作の足元にも及ばないこと、言うまでもない。デモクリトスの自然哲学をどう理解するかは、その末裔たる近代自然科学の本質究明とともに、哲学史・科学史に関心を寄せる者すべての大いなる課題であろう。ただし、デモクリトスの「偶然」危険「回避論の解明は、本稿が未完であるため、遺憾ながら中途にとどまっている。近く別の機会に、完全版を公けにするつもりである。内容的には、本稿は、「始まりへの存在」(『論集』第五二巻2号、二〇〇二年、所収)の「応用」編という性格をもつが、草稿が成立した時期自体は、むしろ本稿のほうが先である。